

# 英語教育におけるオーセンティシティの再考察 : ナラティビティを基軸として

著者	千田 誠二
雑誌名	Otsuma Review
巻	51
ページ	57-66
発行年	2018-07-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006630/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006630/</a>

# 英語教育におけるオーセンティシティの再考察 ーナラティビティを基軸としてー

千 田 誠 二

## 1. はじめに

仮想現実を映し出す3Dなどのデジタル技術の進歩が著しい昨今、オーセンティシティ（authenticity：真正性、本物らしさ）への接近は、私たちの生活だけでなく、概念形成や哲学的思考などにも大きく影響を与えている。例えば、回転寿司屋で見られる高級マグロ解体ショーや、ある小学校が導入したアルマーニの制服の例など、一見場違いと思われるところに本物を演出することは、新たな価値を創造しているようにも見える。

英語教育の分野における「オーセンティックな教材」とは、英語教育用語辞典（2009）によると、「外国語学習用として意図的に作られた教材ではなく、現実に存在する事物をテキストや音声教材としたもの」（p.28）とされる。この用語は従来からしばしば教材英語の質的な側面を指すことばとして使われてきた。そして現在、日本の英語教育を取り巻く環境の変化によって、その意味や価値を再確認すべき時が来ている。

この「オーセンティック」ということばは、平成16年の文科省答申「英語ができる日本人の育成」によって、実践的コミュニケーション能力育成を目指す機運が高まってきてからしばしば耳にするようになった。しかし、当時から10年以上が経った現在、日本人の英語力はなお世界的に低い水準にとどまっており、英語教育制度はさらなるインパクトをもって改革せざるを得ない状況にある。2020年からの小学校英語必修化は、言うまでもなくその様相を反映した例である。また大学入試の新しい「共通テスト」において、インターネットの情報（食べログ<sup>1</sup>やカスタマーレビュー<sup>2</sup>など）を問題として使う想定など、オーセンティシティを一つのキーワードとして、より使えるための英語教育へ向かっていることが伺える。このような時代において、オーセンティックが意味するところは、英語教育や英語学習の文脈において、どんな役割、あるいは目標を指すことばなのだろうか。

## 2. 従来の教材観とオーセンティックな教材

従来英語教育学分野では、読解教材で扱われる英文のタイプは便宜的に「テキストジャンル」と呼ばれ、大きく「評論文」と「物語文」の二つに分けられてきた。評論文は論理的な流れによって文章を構成することで、著者の主張を読み手に納得させることが目的で書かれた文章である。したがって、学習者には主に「筆者の主張文はどれか」、「それをサポートする支持文はどれか」など、論理構成や内容についての問いが与えられることが多かった。一方、物語文は文学に見られるように具体的な出来事や登場人物の心情の綴りなどが書かれている。したがって学習者には、登場人物の情報やそれにまつわる出来事、そして心情などが時間軸に沿ってあるいは因果関係を中心に問いが与えられてきた。このように、教材内容の構成など固定化されたものを対象として教え方が論議されてきたわけである。

ところが先ほど述べたように、「英語ができる日本人の育成」答申以降の英語教育を取り巻く社会の多様化によって、それまでの静的な知識の獲得を重視したやり方からの脱却が図られることとなった。この一連の改革の意図は教室現場にある程度反映されたと思われるが、オーセンティックということばの本質をあいまいにする問題が実践において依然つきまどっていた。それは、日本の英語教育現場に、英語を学ぶ固有の楽しさへの希求と、大学入試などのカリキュラムからくる外発的切迫感との二つの動機づけが別々の形(dual)で存在していることであった(Hayashi, 2013)。往々にして、カリキュラム(大学の理念、カリキュラムポリシー、単位・評価、クラス編成、など)による学習者の動機づけへの影響は大きいと言われている。仮に英語学習への内発的関心やいわゆる実践的な力を伸ばすような活動(ディスカッション、ディベート、協同学習など)を教師が試みると、言語知識を分析的に学ぶことに慣れてしまっている学習者が抵抗感を感じることも少なくない。そのような要因から、いわゆるオーセンティシティを目指した環境設定(原寸大の模擬店を使用する事例など)でありながら、従来の練習・定着重視の活動が行われるケースが多いという事実が見られる。例えば小学校での英語活動では、買い物場面や道案内場面での会話練習がより増加した。筆者が実際に訪れた小学校では、実際の模擬店と同じ大きさのセットと本物そっくりの野菜アイテムを使って、How much is it? の表現練習をする言語活動が行われていた。このような疑似体験を土台とした英語活動はますます増えていくだろう。

### 3. オーセンティックな教材は「本物」を提供しているか

本物に近い言語環境を供給すること自体は、学習者の意欲を喚起する点から望ましいことである。しかし一方で、それは単に言語表現の練習や定着による従来の言語習得観を助長しているにすぎないという懸念がある。表現練習主体の活動は、環境がオーセンティックで本物らしいものであっても、実際の場面での英語のやりとりに見られる多様性を反映しているとは限らないという主張である。

上記のような現場が陥りがちな状況を考えると、我々は英語教育で扱われるいわゆるオーセンティックということばを、教材が持ち合わせている表面的なものだけではなくもっと広義に捉える必要はないだろうか。それはつまり「ナラティブによる状況の文脈化」、つまり英文と英文の間に潜む意味の隙間の存在を十分に認識し、それをできるだけ埋めていく行為までを示すことである。ナラティブの定義は多様であるが、代表的なものとして次の5つの視点によって構成された高橋（2015）の定義を以下に挙げる。

- 1) narrative は、何らかの関連性をもった出来事（story）の連なりである
- 2) narrative では、前景化された登場人物、またはそれに類したものが登場し、何らかの経験をする
- 3) narrative が成立するためには、聞き手（読み手）が必要である
- 4) narrative では、話し手（書き手）が、2) について語ったり書いたりした結果、聞き手（読み手）の心が動く
- 5) narrativity は、有無ではかるのではなく、多寡ではかる特色である

(p.162)

上記の定義をよく見ると、文科省座談会での次の渡邊時夫氏の発言は、英語使用の場面でナラティブが欠如しているという、今日の英語教育界が抱える問題の本質を指摘しているように思える：

私は実践的コミュニケーション能力というのは、それ自体はいいと思います。その実践的な力をどうつけたらいいかというのが問題で、ああいうふうに例題を出してしまったものだから、実践的というのは具体的な場面の言い方を暗記すればいいんだというように短絡的になっている。今まで買い物とか電話とか全部やりすぎるほどやっていますよ。

（平田，菅，古賀，森住，新里，渡邊，2002：15）

つまりこれは、中学校英語教科書の英文を例にとると次のようなことである。中学生の Kenji がアメリカ人の Tom に自己紹介をしている内容である。自己紹介の後、互いに話題は趣味の話へ移っている。この場面の英文は音読してみると 10 秒ほどの短さである。もし、これら英文の意味内容が実際の対話の動きを反映しようとするれば、自己紹介の対話文はそんな簡単に終わらないだろう。たいていの場合、そこでは negotiation of meaning（意味交渉）があるはずで、いわゆる明確化要求（Long,1983）などを伴うだろうし（例：“Oh,could you say it again,please?”）、また、日本語に慣れていない外国人に対して再度繰り返し言ってあげるという可能性もあろう。当然、文中の一つの意味の命題について、現実的には複数の英文が連なっていくのが自然である。また、相手が漢字に関心がある外国人とわかったら（Tシャツに漢字熟語が書いてあるなど）、即座に“Just a moment.”と言って、Tom にペンでその漢字を書いてあげるというプロセスが生じることもあろう。別の買い物の場面ならば、値段を聞いて買う物を特定化する文だけではないことも多い。久しく自分がほしかった物が現品限りで手に届きそうな価格だったが、若干持ち合わせが足りず思案することもあるかもしれない。店員には“I really want it, but I can't buy it now. Could you keep it until this weekend?” というようにお願いするだろう。このように様々な文脈の存在を想定していくと、“How much is it?” からなるテキストは、現実の買い物の場面に展開されるやりとりのほんの一部を切り取って載せたものにしかすぎないことは明白である。真の意味で英語教師がオーセンティックな言語活動を学習者に提供しようとするならば、上記のような多様な文脈状況による自然な「揺れ」を主体的にイメージすることが重要である。そして文意の隙間を埋める問いを与える、あるいは必要に応じて目標言語で付加情報を積極的に与えることではないだろうか。

#### 4. 広義のオーセンティシティへ:テキストのナラティブをどう生起させるか？ —「美しいものが美しいのではない。美しく使われているものが、美しいのだ」—

これは、東京都交通局が東京の交通インフラを支える「整備現場」にフォーカスした写真集『MAINTENANCE』を、3月20日に発行した際に掲げたキャッチコピーである。このキャッチコピーは、オーセンティックな言語活動の本

質をよく捉えていると思われる。脱文脈化されたいわゆる切り取られた美しさではなく、そのときどきの状況・文脈（例えば季節がわかる草花を周辺に入れるなど）を伴って、対象物を再文脈化していくその過程自体が広義の美しさのオーセンティシティであることを表している。

では英語教育の現場において、テキストなどの与えられた英文をオーセンティックなものにしていく過程とはどのようなものだろうか。ここでは、先に述べた物語文や文学作品が含むナラティブを基点に述べていきたいと思う。高橋（2015）も述べているように、実際に物語文や文学素材はいわゆる英語教育で言われてきたオーセンティックと呼ばれる英文ニュースや映画などと同様に「語りの様式」を伴っており、それ自体が語彙、文法学習に最適である。また、TOEICなどの資格試験での力の伸びとの相関性などについても研究されている（西原，2013 など）。

そしてより広義のオーセンティシティを示す例として、テキスト英文を教師自らがその場でオーセンティックなものにすることが可能である。これは、言語が人間の思考と行動とに一体化されて使われたときに、人の神経系を最も活発にさせるというものである。オール・イングリッシュで授業を行う場合、テキスト内容を臨機応変に展開していくのはベテランの教師でも難しいと言われる。与えられた材料から意味を深めたり話を広げたりする指針について、モデルとなるものがこれまでなかったからである。それゆえ、ナラティブを活用したオーセンティックな言語文脈の展開が可能となれば、教室現場にとってその利用価値は高いものと期待できるだろう。

ナラティブを方法論あるいはアプローチとして具体化させるにあたって筆者が注目したのは、ハヤカワ（1985）が説明する「社会的概念枠」と「心理的概念枠」である。その二つの概念枠についてハヤカワは「我々が言語を通して活動や相手とのやりとりをするとき、それまで自身が構築してきた自分なりの概念的枠を用いてその世界を理解する」と述べている。そして心理学者の概念的枠組みとして「動因」「抑圧」「不安」「昇華」を、社会学者の概念的枠組みとして「制度」「役割」「階級」「移動」を挙げている（p.335）。どのような英文テキストであれ、それが社会の枠で生きている人間との関わりについて述べられている以上、必ず含まれていると思われる視点である。

ちなみに、接してきたテキストテーマによって上記の視点はさらに柔軟に捉えられる。例えば、上記の社会学者の概念的枠組みである「制度」は「権威・

権力」,「人為,自然などによるセットされた(不可避の)状況・環境」にまで広がるし,「移動」は「物理的移動,状況変化,好転,悪化」にまで,そして「役割」は「状態の安定化,価値,意味」,「階級」は「意味づけ,位置づけ」にまで視点は広げられるであろう。心理学者の概念的枠組みについて,その心情の特徴である流動性の観点から動作的に説明すると,「動因(生じた結果となった要因)を考え」,「抑圧・規制を受けながら」,または「刺激を受けながら」(肯定的なものもある)の状態の中で「不安や葛藤をしばしば経験する(あるいはその状態が続く)」。そこから「脱するための抵抗や工夫などによって解決をはかることで自律が養われ」,しまいにはその「感情が『昇華』に進む」。この二つの概念的枠組みには,このような「外的」とそれに対する「内的」な作用からなる仕組みの中を,人は常に行ったり来たりしていることが示されている。以下,ある文学作家の作品を紹介し,その内容のエッセンスを上記の視点にしたがって整理してみようと思う。

「一つのカナダ」を希求したカナダ文学者ヒュー・マクレナン(MacLennan, H)は,土着であるカナダ人の新しいアイデンティティを生み出す必要性を感じた一人である。その作品『二つの孤独』(*Two Solitude*: 1945)では,イギリス系とフランス系の二つの移民の間の憎しみの感情が戦争へ発展した内容が描かれた。カナダという一つの国が民族的に二つに分かれてしまうのである。イギリス系住民がフランス系住民に無視されるなど,日常生活の中に「押し込められた」感覚が強いられた。そのような不穏な空気は,人間間ですます不安を増幅させ,土着のカナダ人は融合を求めて新たなカナダのアイデンティティ構築をめざすという過程であった。マクレナンの文学はその橋渡しの象徴として存在したとされている。先述の概念枠に沿ってこの作品をみると次のように整理される。

「制度(セットされた状況・環境)」:「二つのカナダ」をめぐる問題。後半で主人公は当主の腹違いの息子で,カトリックであり,その母親はアイルランド系であった。

「移動(徴兵制という状況への移動・変化)」:父は息子と鋭く対立するようになった。彼自身は英語も仏語も話せるのだが,複雑な生い立ちが彼のアイデンティティを喪失させた。作家を志すようになり逆境を乗り越えた。

「役割(意味,意義)」:息子は先妻の子で,不屈のカトリック教徒である。教義から彼は連邦議会の徴兵制法案成立に反対し,モントリオールでの反



対集会で叫んだ。

「階級（価値・価値づけ）」：彼は先に当主が実業家とともに村に連れてきた元船長の娘に密告され、捕らえられて軍隊に送られた。クライマックスでは当主の友人で元船員の孫娘に当たるスコットランド系の女性と結婚し、平和の象徴として描かれた。

（千田（1994）による各項目の解説を筆者が修正した上で各概念に当てはめた）

概念枠にしたがって内容を分けることは少々大雑把な面も否めないが、英語教育で扱われる抽象的な描写が中心の評論文テキストをナラティブにする上では特に、上記の視点での文脈化が参考になるのではないだろうか。次に、筆者の勤務する大学で教えている以下の Reading テキストの英文を、上記の視点によってナラティブにするとどのようになるだろうか。

例文：Almost any type of visual art can be used, from painting to sculpture to performance arts like music, dance, and even puppetry. (*Reading Fusion2*, p.10)

訳：絵画から彫刻，あるいは音楽，ダンス，人形劇のようなパフォーマンスアートまで，ほとんどすべての視覚アートが（アートセラピーに）使うことができる。

このアートセラピーについての英文は、上記のようにテキスト原文ではナレーターからの見方で書かれた一文である。これを先述の視点を参考にナラティブにしてみる。例えば社会的概念の枠組みで行えば、「制度（セットされた状況・環境）」とあった。そこで、ある人物の身体的な①「状況」を問うてみる。「その人はどんな状況であったか？」という視点によって文脈化を始められよう。その状況からの②「移動」としてテキスト英文の any type of visual art との関わり（あるいは実践）に至るまでの経緯を語ることができる。そしてそれを実践すること（状況の「移動」）がある価値や意味を生み（③「役割」），最終的に生活の中でのその（art therapy の）意味づけ・位置づけ（視点の④「階級」に相当）に至るという流れである。このナラティブを英文にしてみると例えば次のようになる。

例文： ※就職活動中の女子学生Aさんを主語として

①制度（セットされた状況・環境）➡ What condition was she in? She has been doing job-hunting for these months, but it was not successful, because



she didn't do quite well in her interviews. She was so stressful and depressed that she began to do various activities to release her stress by taking a medicine, consulting a doctor, or having a massage, etc. But, her health problem was not solved, so she thought it difficult to control her stress by normal treatments.

- ② 「移動」(状況の移動➡) One day, she was in a waiting room of a beauty salon. she found a fascinating book titled "Art therapy guide". After reading it, she decided to start an art therapy. She chose music therapy. It made her really relaxed especially when she did it before going to bed. Six months later, she began to have dance therapy as well. Then she began to feel healthy and could forget every stressful things during art therapy.
- ③ 「役割(価値や意味)」: Gradually, she noticed that any arts were connected with each other and they had a maintenance system for keeping human healthy.
- ④ 「階級」(意味づけ・位置づけ): So, art therapy is like a doctor and an entertainment for her as well.

すべての英文にナラティブの特徴を当てはめる必要はないし、また逆に一文レベルでもナラティブの特質を利用してある程度の文脈化ができる可能性がある。英文の量やレベルにしたがって冗長性を担保し独創的なナラティブを作っていけば、豊かな言語経験を英語で学習者に提供できるものと思われる。そうなれば教師と学習者双方にとって実りのある英語活動になろう。また、教師自らがその力を育むということは、物語文や文学作品に含まれるような人間の感情や行動を多様な視点によって深く理解し、英語教育の場で提示することの繰り返しに他ならない。そうでなければ英語教師は、本物らしい環境でも固定化されたテキストの表現を繰り返すだけ、それも記号としては教えて教えることにとどまり、自身も学習者もそこに何の意味も紡ぐことにはならないだろう。「経験の中に何を見出すべきかを知らなければできごとはいはならない」とあるように、多様な文脈を積極的に作ることによって、意味を見出すオーセンティックな言語活動が可能となるのである。

## 5. 最後に

本論ではまず前半に、英語教育におけるオーセンティックな英語と呼ばれるものを再考察するとともに、従来授業で扱われたオーセンティックな教材と言われていたものが、言語活動においては必ずしも本物らしい形で活かされていないことを述べた。後半では、思考と行動における実際生活における言語使用がどのような視点のもと行われ得るかを、ナラティブ使って示した。今後より多様化される英語教育において、扱われる過程が一体となったオーセンティシティの価値が再認識されると同時に、英語教師の個性が結実するための種子として十分吟味され、実践されることを願う。

注1. 飲食店についての情報を提供しているウェブサイトのこと。利用客による口コミや5段階評価などが載っている。

注2. 商品を購入した人が実際に使ったりした感想を書く記事のこと。

## 引用文献

- Bennett,A.E.(2011). *Reading Fusion2*. 東京：南雲堂
- Hayashi,H. (2013). “Dual Goal Orientation in the Japanese Context: A case study of Two EFL Learners.” *Language Learning Motivation in Japan*. pp.75-92 Bristol: Multilingual Matters.
- Long,M.H. (1983). “Native speaker/non-native speaker conversation and the negotiation of comprehensible input.” *Applied Linguistics*, 4.2, pp.177-93
- MacLennan,H. (1945). *Two Solitudes*. Toronto: McClelland&Stewart
- Oller,J.W.1983. Story writing principles and ESL teaching. *TESOL Quarterly*, 17. 1, pp.39-53.
- Paivio,A., Yuille,J C., and Madigan,S A.(1968). Concreteness, imagery, and meaningfulness values for 925 nouns. *Journal of Experimental Psychology Monograph Supplement*, 76, pp.1-25.
- 浦野研, 酒井英樹, 渡邊時夫 (1995) 「幼稚園イマージョン・プログラムにおける教師の発話 Teacher talk in kindergarten immersion program: Teacher's speech modification over time」『中部地区英語教育学会紀要』25, 151-156.
- 大下邦幸 (2009) 『意見・考え重視の英語授業—コミュニケーション能力養成へのアプローチ』東京：高陵社書店
- 白畑和彦 (他) 著 (2009) 改訂版『英語教育用語辞典』東京：大修館
- 高橋和子 (2015) 『日本の英語教育における文学教材の可能性』東京：ひつじ書房

- 千田明夫 (1991) 「ケーブ・ブリトンにおける Scottish Heritage —ヒュー・マクレナンの作品を中心に—」『カナダ文学研究』第3号 79-90 日本カナダ文学会
- 千田明夫 (1994) 「カナダにおける民族の多様性 —ヒュー・マクレナンの作品を中心に—」『キリスト教と諸学：論集』Volume9, 84-94 聖学院大学・女子聖学院短期大学宗教センター
- 西原貴之 (2013) 『大学英語教育に文学教材を使用する際の留意点：文学テストのスコアと授業成績及び TOEIC のスコアとの相関分析からの示唆』 第 85 回大会 Proceedings : The 85th General Meeting of The English Literary Society of Japan, pp.25-26 May 2013.
- ハヤカワ, S.I. (大久保忠利訳) (1985) 『思考と行動における言語』東京：岩波書店.
- 平田和人, 菅正隆, 古賀範理, 森住衛, 新里眞男, 渡邊時夫 (2002). 「検証と展望—文部省戦後半世紀の外国語教育政策—」. 『英語教育 Fifty』 51 (3) : 7-26.
- マーク・パワー (2018) 写真集『MAINTENANCE』東京都交通局
- 渡辺時夫 (監修), 酒井英樹 (編集), 浦野研 (編集), 塩川春彦 (編集) (2003) 『英語が使える日本人の育成—MERRIER Approach のすすめ』 東京：三省堂